早稲田大学審査学位論文
博士（人間科学）
概要書

熟練者に対するピアノレッスンにおける身体的相互行為を通した演奏表現技能の指導

Embodied Interactions between University-level Music Students and an Instructor in Piano Lessons in Musical Expression Skills

2022 年 1 月

早稲田大学大学院　人間科学研究科
山本　敦
YAMAMOTO, Atsushi

研究指導担当教員：　古山　宣洋　教授

熟練者に対するピアノレッスンにおける身体的相互行為を通した演奏表現技能の指導
Embodied Interactions between University-level Music Students and an Instructor in Piano Lessons in Musical Expression Skills

山本　敦（YAMAMOTO, Atsushi）　指導：古山　宣洋教授

問題

第 1 章では、現象を捉える観点の説明の後、問題の理論的検討および方法論的検討を通して、本研究の目的が導出された。まず、本論文が対象とする「ピアノレッスンにおける演奏表現技能の指導」という現象を、共同体の実践に埋め込まれたものとしての身体的技能という観点から、技能を構成する知識・知覚・運動的要素の伝達と、実践固有の規範性の獲得に着目して指導を捉えること(1.1 節)、ピアノレッスンでは、技能の構成要素が極めて複雑であり、かつ、演奏表現には同型性と個性が同時に求められるという特殊な規範性があること(1.2 節)の 2 点から整理した。

続いて、技能の知覚・運動的要素の伝達における困難を暗黙知理論(Polanyi, 1966)の観点から整理し、暗黙知パラダイムに基づく身体的技能の指導に関する研究の概観から、指導における相互行為の具体的な展開過程という水準への注目の必要性を論じた(1.3 節)。具体的には、暗黙知的技能には言葉で伝えられない要素があり、その獲得は不完全な教示を手掛かりとした学習者自身の努力に頼るしかない、という前提の存在と、指導における言葉を知識の命題的記述の媒体として捉えることがその由来であることを指摘する。そして、身体的技能の日常的な指導においては、言葉は知識の記述ではなく、実演の呈示や学習者の実行、実行の物理的調整などと精妙に協調して組み合わせられることで指導実践を相互行為的に構成する資源として働くことを指摘し、この相互行為の水準への着目によって、身体的技能の指導についての新たな知見が見出せる可能性を論じた。

そののちに、相互行為の具体的な展開過程という水準の分析において現在最も有力であり、身体的技能の指導についての知見の蓄積も進みつつある、社会学の会話分析の方法およびそこから発展したアプローチについて概説し、その知見を整理することで、身体的技能の指導の分析について、会話分析の方法は重要な理論的前提を欠いていることを明らかにした(1.4 節)。会話分析では、コミュニケーション上の社会的行為(質問や約束など)が、発話やジェスチャといった資源がどのようなやり方で産出されることによって認識可能になるかという、社会成員に共有されたデフォルトの手続き(＝行為の理解・産出の枠組み)を詳細な観察から明らかにする。しかし、会話分析は現象学を基盤とし、この共有された枠組みが観察者・被観察者・論文の読者に共有されていることを分析の前提とするため、特にピアノレッスンのような実践依存性の高い技能の指導では、分析の妥当性を担保できない。このため、共有された枠組みとは別の水準の分析の基盤が必要となることを論じた。

この方法論的基盤を備えた分析の方法として、会話分析をその基盤の一つとする協働的行為分析(Goodwin, 2017)を、その記号論的側面に着目して再解釈することで利用可能であることが主張される（1.5 節）。協働的行為分析は会話分析の一変形とみなされてきたが、上述の分析の基盤として記号論を導入している点で分析の射程が大きく変化していることは見落とされてきた。協働的行為分析では、相互行為上の資源は単体で意味を持つものとしてではなく、諸資源間の意味-文脈関係によって特定の意味を持つ記号現象（象徴記号、類像記号、指標記号）へと組織化されると考える。この相互行為的な組織化の過程の分析に資源間の記号論的な関係の概念を用いることで、諸資源から成る記号論的構造がいかなる理解可能性を前提として組織されているかが分析可能となることが主張される。

以上の理論的検討から、以下の分析の焦点が導出された(1.6)。それは、①演奏表現技能の暗黙知的構造に起因する、言葉で示しがたい知覚・運動といった構成要素の呈示と、それらの要素の統合による実行にまつわる困難はどのような相互行為的構造によって解決されているか、②その解決の過程で言語はどのように機能を果たしているか、③諸構成要素の統合はどのように共同的なものとして達成されるか、④規範的表現でありかつ個性的であるべしという相反する要求はいかに解決されるか、⑤協働的行為分析の身体的技能の分析手法としての有効性の確認、の 5 つである。

データ

第 2 章では分析対象となるデータについて説明される。首都圏の X 音楽大学のレッスン室において日常的に行われている 2 台のピアノを用いたレッスンが収録された．参加者は X 音楽大学教授であるプロの演奏家 1 名と，学生 6 名であり，レッスンは学生 1 名あたり約 30 分であった．分析には動画解析ソフト ELAN を用いた。

研究 I

第 3 章では、不可視である演奏音への指差しがいかに理

解可能なものとして組織されるかの分析を通して、演奏表現の構成要素の呈示がいかになされるかと、協働的行為分析の身体的技能の分析手法としての有効性が検討された。

演奏音への指差しはジェスチャと言葉だけでなく、先行行為や、演奏および身体的姿勢が楽器に対して精妙に調整されて呈示される“誇張された演奏状態”との相互文脈的関係の中で理解可能になることが明らかになった（図 1）。

肝要なのは、誇張された演奏状態の理解の文脈として、楽曲-身体-楽器-演奏音という演奏音の産出に関わる因果的連続性についての背景知識が指標されていたことである。この知識が演奏音への指差しの理解に不可欠な文脈となっていることは以下のことを示唆する。一つは、背景知識が共有されている場合、言葉を含む文脈的統合態の水準で演奏表現技能の暗黙知的要素を指標することが可能であるということであり、もう一つは、背景知識が共有されていない場合、誇張された演奏状態を含む文脈的統合態を包括的に解釈できる背景知識の存在へと学習者の探索を方向付けることができることである。

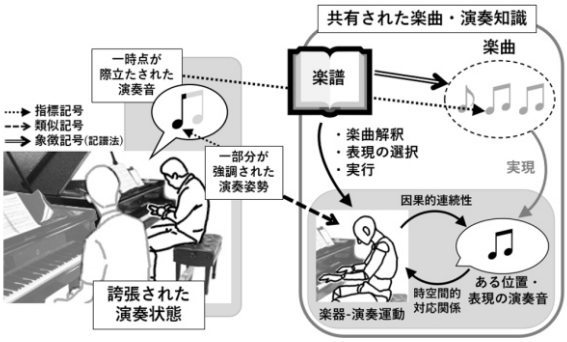

図 1. 演奏音への指差しにおける諸資源の記号論的構造

研究Ⅱ

第 4 章では、教示から学習者による演奏表現の達成に至る指導の過程の分析を通して、表現の構成要素の呈示と統合がいかになされるかが検討された。

表現の各構成要素は、楽曲を呈示する様々な資源（発話・歌・演奏）と、それを強調するように身体の様々な部位で産出される指揮のような軌道のジェスチャとの共起による類似指標関係によって示されていた(図 2)。この楽曲＋ジェスチャという記号論的構造は、指導者と学習者の双方によって表現意図の身体的表出として繰り返し用いられ、教示や理解の例証といった相互行為上の行為の資源となっており、さらにジェスチャの同期を通して、学習者の演奏運動の調整の資源ともなっていることを明らかにした。

また、学生の演奏表現が規範的な表現であることは、共同体の古参者であり、演奏表現について判断を下すことが可能な指導者という立場にある教師の指導に従い、その承認を受けることによって相互行為的に確認が与えられていた。承認は楽曲＋ジェスチャの同期関係によって示される表現意図の身体的表出の同型性によって可視化されていたが、学習者のその軌道は、大枠で指導者のそれを模倣しつつも、詳細においてはむしろ指導者の側からの模倣的同期が観察された。ジェスチャと表現上の特徴が対応付けられていることを鑑みると、この相互行為的構造は、学習者の表現を規範的かつ個性的なものとして構成する資源となっていると考えられる。

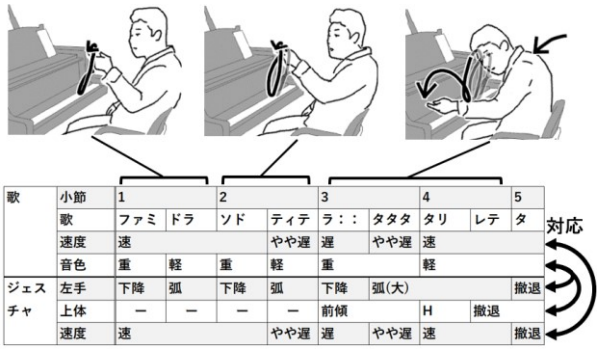

図 2. 楽曲呈示資源とジェスチャとの共起関係の一例

総合考察

第 5 章は総合考察に充てられた。まず、二つの研究の知見を要約、考察しつつ、第 1 章で導出された各分析の焦点に対して回答が呈示された。5.1 節では、演奏表現の伝達における言葉の機能と知識の共同的構成について論じ(焦点①②③⑤)、知識・知覚・運動の相互行為的呈示と技能の実行の、広義のジェスチャによる媒介について考察した。5.2 節では、演奏表現の規範性と個性の契機となる相互行為的構造について論じた（④⑤）。5.3 節では、ジェスチャの同期と調整による演奏運動の同形化の観点から、知覚や運動に関する相互行為上の意味生成・理解に関する基盤として、不変項およびアフォーダンス概念（Gibson, 1986）を提案した。5.4 節では、本論文の貢献、課題および展望を述べた。

引用文献

Goodwin, C. (2017) Co-operative action. Cambridge: Cambridge University Press.

Polanyi, M. (1966) The tacit dimension. New York: Doubleday.（ポランニー, M. (2003) 暗黙知の次元. 高橋勇夫(訳) 東京: ちくま学芸文庫.）

Gibson, J. J. (1986). The ecological approach to visual perception. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Inc.